

2004 年度夏学期日本史学特殊講義レポート

「軍記物語の時代～承久記をめぐる～」

40085 太刀岡勇気

序章 はじめに

中世に書かれた書物として、承久の乱を振り返って書いた軍記物「承久記」を取り上げたい。「承久記」には（一）慈光寺本（二）前田家本（三）流布本（四）承久兵乱記（五）承久軍物語 四系統の本文が存在する。（このうち（一）慈光寺本は、ほかの四本と大きく記述内容が異なり、同じ承久記の異本として論じるのがためられるほどである。）ここでは（三）流布本と（四）承久兵乱記を取り上げ、それらを比較することで両者のちがいを明らかにすることを目的としたい。なお（三）流布本としては「慶長古活字本承久記」（新日本古典文学大系43「保元物語・平治物語・承久記」収録）を（四）承久兵乱記としては「承久兵乱記」（おうふう 村上光徳編）を用いる。

第一章 「承久記」の構成

承久記の構成を考える上で参考になるのは、「承久兵乱記」の項目立てである。これは古活字本承久記にはついていない。おそらく後世の人が読みやすいように内容を考えてつけたものなのだろう。そこでこれを使って古活字本を検討する事で両者がどのくらい対応しているのかをまずみていきたい。

表1 承久記と承久兵乱記の比較

章	承久兵乱記の項目立て	古活字本承久記	承久兵乱記
	承久兵乱記・承久記 上		
1	後鳥羽院の御事	p371 上 L1 百王八十二代	人王八十二代
		p372 上 L10 領家をあたとす	領家をかるしめけり
2	頼家実朝昇進并こうぎよの事	p372 上 L10 彼右大将	頼朝は
		p374 上 L2 失にける	おぼつかなし
3	義時ついたう御ひやうぢやうの事	p374 上 L3 院の関東を	およそ院
		p376 上 L2 同く被召籠ぬ	めしこめられ給ひけり
4	光季親広をめさるる事	p376 上 L3 平九郎判官胤義	又、胤義をめして
		p376 下 L2 被留ぬ	たてまつりけり
5	官兵光季をせむる事	p376 下 L3 深行程に	さるほどに光季も
		p380 上 L1 被思召合ける	おぼしめしあはせられけり

6	公継公いけんの事	記事なし	大将公経ふし
			申されけれ
7	方々へせんじを下さるる事	p380 上 L16 東国へは院宣を	光季ついたうせられて後
		p380 下 L14 被尋けり	の給ひける
8	二位殿くどきこと并ひきで物の事	p380 下 L14 推松	狎松丸をたづね出ださる
		p381 下 L8 各帰ぬ	一どうに立ちにけり
9	関東合戦ひやうぢやうの事	p381 下 L9 明る廿日のとく	そののちいりあひのほどに
		p382 上 L20 方々へ向ふ	十万よきをさしのぼす
10	義時宣旨の御返事の事	p382 上 L20 同二十七日	同廿七日
		p383 上 L10 覚へぬさま也	たましひをけし給ひぬ
11	京都方々へ手わけの事	p383 上 L10 一院	院は
		p383 下 L3 歩せける	みえたりける
12	高重うちじにの事	p383 下 L4 海道先陣相模守	五月卅日
		p384 上 L12 通りけり	感じ給ひける
13	尾張国にて官軍かせんの事	p384 上 L13 六月五日辰時に	六月五日辰の刻に
		p386 下 L1 行末も不知	しりぞきけり
14	秀康胤義おち行事	p386 下 L1 中三郎・小島四郎	長野の四郎・小島の三郎
		p386 下 L11 落行けり	おち行きけり
15	阿曾沼まめどをわたす事	p386 下 L12 大豆渡へは	同六日のあかつき
		p386 下 L14 主もなし	にげちりける
	承久兵乱記 下		
16	官軍はいぼくする事	p386 下 L14 敵なくて	さる程に
	(あまり対応していない)	p386 下 L22 二三取ぬは無けり	いけどりけり

17	重忠ささへたたかふ事	p386 下 L23 被討残て落行ける	京方に尾張源氏
		p388 上 L4 覚へたり	おちてゆきけり
18	相模守いくさのせんぎ方々 手わけの事	p388 上 L5 東海道の大勢	同七日
		p388 下 L6 北陸道へぞ向ける	一万五千よき也
19	朝時北陸道より上洛の事	p388 下 L7 式部丞朝時は	さる程に式部丞朝時は
		p389 上 L12 待懸たり	むかうべきやうぞなき
20	一院さかもとへ御出の事	p389 上 L13 去程に	八日のあかつき
		p389 上 L21 左右なくも不組	みえさせ給ひける
21	方々せめぐち御かための事	p389 上 L22 東坂本梶井御所	主上・上皇は
		p389 下 L19 向ひける	五百よ人むかひけり
	承久記 下		
22	勢多にてかせんの事	p390 上 L1 海道先の陣	同十三日
		p391 上 L20 留りけり	えざりし也
23	宇治橋かせんの事	p391 下 L3 武蔵守	同十三日
		p393 下 L5 静りにけり	しづまりけり
24	信綱兼義宇治川をわたす事	p393 下 L6 武蔵守	武蔵の守
		p394 下 L3 助かりける	とつて返しけり
25	関東勢水におほれし事	p394 下 L4 佐々木に続て	二ばんにうちいるともがらは
		p396 下 L2 是を討	おちあひくんだりけり
26	宇治の手やぶれし事	p396 下 L3 京方より	京がたの大將
		p397 下 L6 来り加ける	本山にかへりけり
27	秀康胤義等都へかへりいる 事	p397 下 L7 去程に	京がた
		p398 下 L6 心の中こそ哀なれ	やすみにけり

28	院宣を義時に下さる事	記事なし	十五日巳の刻
			うち入れけり
29	胤義自害の事	p398 下 L7 さて胤義	胤義は
		p399 上 L17 被切ける	なぐさめけり
30	京方の兵ちうりくせらるる事	p399 上 L18 京方軍破て	山田次郎重忠
		p399 下 L11 被切ぬ	きられにけり
31	京都より飛脚人々評定の事	記事なし	武蔵守
			たてまつされける
32	公卿罪科の事	p399 下 L12 去程に	さる程に
		p401 下 L10 筆の跡計也	おろかなり
33	一院隠岐国へながされ給ふ事	p401 下 L11 去程に	七月六日
		p402 下 L9 暁の声 (歌)	あかつきのこゑ (歌)
34	新院宮々ながされ給ふ事	p402 下 L20 同廿二日	同廿日
		p403 上 L15 多かりけり	おほかりけり
35	広綱か子息きられし事	p403 上 L15 佐々木山城守	同十一日佐々木山城の守
		p404 上 L14 譬ん方も無けり	申しける
36	胤義が子共きられし事	p404 上 L15 其外	京都にもかぎらず
		p404 下 L11 絶入給ぞ理なる	くびをかきぬ
37	中院阿波国へうつり給事	p404 下 L12 抑、隠岐の法皇	閏十月十日
		p405 下 L14 無りけり	とどめれ

まずわかることは、承久兵乱記は下巻が 16 章の官軍はいぼくする事で始まるのに対し、古活字本では 22 章勢多にてかせんの事から下巻にはいる事である。(慈光寺本は 10 章義時宣旨の御返事の事で分けられている) 承久兵乱記では木曾川を渡って鎌倉勢が西側に入るのを許してしまい京側の圧倒的不利が判明した局面、古活字本では勢多・宇治の最終防衛ラインが突破され京側の敗北がほぼ決定した局面(慈光寺本では押松が鎌倉から追い返され承久の乱が始まった局面)で分けているということになる。もちろどこで分けるかには紙面の都合が大きくかかわっているが、古活字本と承久兵乱記で違った局面で分けている事は、両者の間に直接的な親子関係がないことを示すものではないだろうか。ここで章を改めて成立年代と作者像を考えてみたい。

第二章 承久記の成立年代と作者像

成立年代はよくわかっていない。古活字本は p371 上 L1 に後鳥羽院、p404 下 L12 に土御門院の諡号が用いられているのに順徳院は p402 下 L10 に 新院としかかかれていないことから、順徳院から後鳥羽院に諡号が改められた仁治三年(1242)七月以降、佐渡院に順徳院の諡号が贈られた建長元年(1249)七月以前に一応の原型が作られたと考えられている。(承久記解説 p605, 606 参照) 若干根拠が薄い、古活字本がかなり早い段階で作られたという事はほぼ間違いないだろう。承久兵乱記は最終部分に「院ははてさせ給ひしかども、四条院の御すゑたたざりしかば、後嵯峨院へ御位まゐりけり。此院と申すは土御門院の御子なり。」という記事があることから文永九年(1272)後嵯峨院崩御以後の成立である事は確実である。(承久記解説 p605 参照) また 1 章後鳥羽院の御事 (p10 L11) に「第二のみこを御くらみにつけたてまつらせ給ふ。順徳院これなり。」という記述もある。このことから見て、承久兵乱記のほうが古活字本承久記よりも新しい事はほぼ間違いない。さらに、承久兵乱記は、後嵯峨院を同じく最終部で「此院と申すは土御門院の御子なり」と説明しているところからみて、かなり時代が下った新しいものであると思われる。この皇位継承は幕府側に介入を許すきっかけとなった一大事であり、後嵯峨天皇が土御門院の子どもであることを知らないものは当時いなかったはずだからである。また 37 章中院阿波国へうつり給事では、「閏十月十日、土御門の中の院、土佐の国へうつされさせ給ふ。」とあるのに、34 章新院宮々なかせ給ふ事では「同廿日、新院、佐渡の国へながされさせ給ふ。」とあつて統一が取れていない。これと上に述べた考察から、承久兵乱記はまったくオリジナルというわけではなく、後から編集されたものであると考えられるのである。古活字本と兵乱記は直接的な親子関係には無いが、まったく無関係ではなく古活字本の原型の記述も参考にして兵乱記が編集されたため、記述の類似性が生まれたと考えられる。

次に作者像について考えてみたい。承久記の作者は京側の保守派であろうと推測される。兵乱記 P11 L7「是(守護地頭の設置)によって領家は地頭をそねみ、地頭は領家をかるしめけり。」、p11 L8「頼朝は伊豆の国の流人たりしが、平家ついたうのみんぜんをかうぶりて、治承四年の秋の比むほんをおこして、六ヶ年のあひだ天下やすからず。」という記述がある。ここから旧来の土地制度を支持する京側勢力であり、頼朝が組織した地方武士団を快く思わない保守派である事を読み取る事ができる。古活字本にもほぼ同様の記述が見られる。(p372 L9・10・11「領家は地頭をそねみ、地頭は領家をあたとす。彼右大将と申は、去平治元年に右衛門督信頼と謀叛を興して失にし左馬頭義朝が三男なり。」) しかしながら、その記述は中立的な態度に基づいている。京側につかず院のたくらみを鎌倉にいち早く伝え、官軍に大きな打撃を与えた伊賀判官光季の最期が感動的に語られている。(古活字本 p376 下 L3~p379 下 L16 に非常に詳しくかかれ、最後に「『あはれ勇勇しかりける兵哉』と上一人より下万民迄、ほめ惜まぬ者ぞなかりける」と最高の評価が与えられている。) これに対し戦になるとすぐに負けてしまった情けない官軍は、兵乱記 p91 L10・11 に「坂東の兵におひせめられたるありさまは、ただたかのまへの小鳥のごとし」と厳しく批判されている。これらのことから京側であろうと鎌倉側であろうと勇敢な武士は高く評価するとい

った客観的に物事を眺められる人物であることがわかる。

第三章 全体の構成の比較

次に全体の構成を見てみよう。承久兵乱記の 21 章方々せめぐち御かための事の後半の記事（京中の僧侶が源平合戦のときに源氏に助けてもらった恩があるため気乗りしないながらも、朝廷に協力する決定をする記事 (p73 L12~p74 L9)）と同趣旨の記述が古活字本の 6 章に当たる部分（p380L2~p380L15）に入っているといった順序の違いもみられるが、その数は少ないことから、構成は類似性が高いといえる。ただし兵乱記の 6 章の公継公いけんの事・28 章院宣を義時に下さる事・31 章京都より飛脚人々評定の事の記述が古活字本には見られない。ここで、重要なのは義時追討の院宣と保身のために逆に義時に下した院宣が古活字本には収められていないということである。義時追討の院宣は官軍の唯一のよりどころだったはずであり、これが収められていないというのはおかしい。乱後すぐ作られ正確な院宣の本文を手に入れることができなかつた古活字本は院宣を載せていないが、時代が下ってから書かれた兵乱記は、院宣が記録に残されていたため収録することができたのだろう。

さらに 32 章公卿罪科の事以下の事の顛末を語る部分に関しては記事内容は重複するところが多いが、古活字本のほうが承久兵乱記よりも具体的記述に富む。例えば、官軍の中心として活躍した胤義の子どもが切られる場面では、自分の命と引き換えにしても何とか一番上の十一歳の子どもを残そうとする乳母は共通して描かれているものの、九歳・七歳・五歳の最期の場面は兵乱記にはない。古活字本 (p404 L3~L8) では「手越の河端にをろし置誰ば、九・七・五は乳母乳母に取付て、切んとすると心得て泣悲む。三子は何心もなく、乳母の乳房に取付て、手ずさみしてぞ居たりける。何れも目もあてられぬ有様也。(中略) 四の首を取て参りぬ。四人の乳母共、空きからをかかへて、声々に泣き叫有様、譬て云ん方もなし」と感動的に描かれる。これは古活字本つくられた早い段階では事の顛末の情報は直接取材したり、噂になっているのを聞いたりすれば手に入れる事ができたため記述を充実させる事ができたが、兵乱記はその情報が付け加えられる前の古活字本の原型を用いていて具体的なエピソードは記録に残っていないため後から手に入れることができず具体性の乏しい記述になってしまったというところに違いがあるのだと思われる。事の顛末を述べた後の最終部分に承久の乱に対する筆者の評価が両者で大きく異なるのは、これは承久兵乱記を編集した編者があとで自分の意見として付け加えたためであろう。

個々の記述に関しては、内容・視点・戦闘に参加した人名などの点に違いが見られる。例えば院宣を持って関東に下った押松が捕えられ命からがら戻った際の情景描写を見てみよう。古活字本では (p382 下 L5) 「院宣の御使とて関東へ下りなば、大名共に賞せられて、馬鞍被引、徳付て上らんずるとこそ思しに、徳迄は無とも、かかるからき目に逢つる事の悲しさよ。(中略) 抑、我が首はもとの如く付たるやらん、げに我は元の身にて行くやらん、うつつ共不覚して、常は首をさぐり足をさぐり、夢路を行心地をしけれ」と非常に面白く

かかっているが、兵乱記では p51 L5 に「狎松ゆめのこちしてのぼりけるが」と書いてあるのみであり面白みにかける。たいていの場合古活字本のほうが情景描写がくわしく、発言内容も具体的に押さえられていてわかりやすく面白い場合が多い。これは上で述べたように古活字本が、原型に取材したエピソードなどを加えてより詳しくしたためだろう。

人名に関しては、木曾川を渡る時におぼれて命を落とし、泰時に「あたら侍共を失て、泰時一人残止ても何かすべき。」と言わしめた人物を取り上げると、同じ人物と思われる侍たちの名前が、兵乱記と古活字本では以下のように異なっている。

表2 兵乱記と古活字本に表れる人名の違い

布施左衛門次郎	久瀬左衛門次郎
みやまの弥藤太	大山弥藤太
秋田城四郎	安芸庄四郎
諏方の刑部四郎	片穂民部四郎
神崎次郎	神沢八郎
科河次郎	科河六郎太郎
相馬三郎子ども三人	相馬五郎子共三人
志田小次郎	下妻小次郎
佐野次郎	佐野八郎入道
佐野小次郎	佐野次郎太郎

このように人名は異なるもののある程度の類似性はもっている。これは人名がカナを用いて音で記録されていたものを漢字に直した際に生じた違いであると推測される。

第四章 軍記物語の時代

軍記物語は平安時代の末武士の台頭とともに生まれ、鎌倉時代にもっとも隆盛を誇った文学作品である。なぜこれほどまでに軍記物語が作られたのだろうか。そこには時代の要請があったのである。軍記物語は勝った側の功績を載せその人物の名誉向上を図るとともに、負けた側の勇敢な最期を載せる事で名誉保全を図るのがその大きな目的である。自らの功績を示すために竹崎季長が蒙古襲来絵詞を描かせたことはあまりにも有名であるが、それと同じようにその時々の戦を描いた軍記物語に自分の名前が載ることが自らの功績を世間の人々に知らしめる最良の手段だったのであり、負けた側にとっても主君の勇敢な最期が書かれることで末代までの誇りとしたのである。鎌倉時代は、戦での功績を他人に認められることで土地や地位が与えられる時代であり、名誉がもっとも重んじられたからこそ軍記物語が盛んに書かれたのである。このあと南北朝の動乱を経て幕府が弱体化し、実力が即土地や地位につながる下剋上の時代に入ると、他人に功績を認めてもらっても意味がな

くなり自分の力が全てとなったので、軍記物語の必要性がなくなり時代とともに衰退して
いってしまうのである。軍記物語に異本が多く存在することはそれだけ多くの人に
必要とされ広く読まれたということを端的に示すものなのではないだろうか。